

編集後記：これは自然科学一般に共通して言えることですが、特に気象学・大気科学では、研究というのは基本的にすべて観測に基づいているという点が特徴です。事実は観測から引き出され、理論も観測を基にして発展するものが多くあります。如何なる理論も観測によって検証されてはじめて真理となります、つまり特に気象学では研究にはデータが不可欠であり、データを持っているところが一番力があり、偉いのです。その昔、西遊記の中で、孫悟空がきん斗雲に乗ってはるか彼方まで来たと思っていると、実は自分はどんなに遠くに飛んで行ってもやはりお釈迦様の手の平の上にいることに気がつくという話があります。私は常々気象の研究者というのは、多かれ少なかれ皆、気象庁というお釈迦様の手の平の上にいるようなものだという気がしてなりません。長官をはじめとして最前線の観測者に至るまでの方々の日々耐えざる努力によって、観測データが集められ処理されて今日の気象学は支えられています。気象の研究はこうして大変な努力の上で集められたデータの上に成り立っているわけです。如何に我々が特別観測を組織しても、やはりお釈迦様の手の平の上で観測をしているように思われます。今日、データの権限の問題が大きくなってきました。省庁間の壁、機関間の壁が厚くなる一方で、データがなかなか流通され難くなってきています。これは気象の研究者、特に大学にいる研究者にとっては憂慮

すべき問題です。気象の研究では、学問の発展はデータの流通の度合に比例するといっても過言ではありません。諸々の問題があることはよくわかりますが、やはりお釈迦様は慈悲深いものであってほしいと願うこの頃です。

今年から「新用語解説」が復活しました。言葉も生き物で、生成流転するものです。日々新たな概念が生まれ、それを表す新しい言葉が生まれます。また、同じ言葉にも新たな意味が付け加わり、あるいは別の意味にもなることもあります。時代と共に忘れ去られ、風化してしまうものもあるでしょう。この「新用語解説」では用語のその時代における最もふさわしい内容を解説していきたいと考えています。たかが用語、されど用語です。如何なる概念を議論する上でも、共通の定義を持つ用語が不可欠です。そのような論議の基礎を与えるような「新用語解説」にしたいものです。気象学・大気科学が自然科学の一つである以上、その用語は（広義の）観測に基づく研究によって出来上がるものと思われま。その昔、孫悟空もお釈迦様の教えがあったからこそ正しい言葉を操れるようになりました。やはり新しい気象の言葉（用語）もお釈迦様の手の平の上で出来上がるもののように思われます。取り留めの無い編集後記になってしまいましたが、ここにあらためて皆様に「新用語解説」への御協力をお願いして終りと致します。（坪木和久）